

徒然草

つれづれぐさ

第十一段

だいじゅういちだん

兼好法師

けんこうほうし

神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にた

かななづき

くるすの

うところ

す

やまぐち

づね入ることはべりしに、はるかなる苔の細道を踏み分

い

こけ

ほそみち

ふ

わ

けて、心細く住みなしたるいほりあり。木の葉にうづも

こころほそ

す

お

こ

は

るるかけひのしづくならでは、つゆおとなふものなし。闕

い

のう

あ

伽棚に菊紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあ

かだな

きくもみじ

おち

ればなるべし。

かくてもあられけるよ、とあはれに見るほどに、かなた

の庭にわに、大きな柑子こうじの木の、枝もたわわになりたるが
まはりをきびしくかこい囲ひたりしこそ、少しことさめて、こ
の木おほなからましかば、と覚えしか。